

相当しており、1対2の割合で女性が多くかつ、その過半数は17歳以降で占められていた10歳代ですでに歯周炎と診断された例は47例であり、うち26例は若年性歯周炎の範疇に含まれる高度歯周炎例であった。また、特殊な歯周疾患として、ダイランチン歯肉増殖症6例、特異性歯肉線維腫症1例、急性ヘルペス性歯肉口内炎3例、Papillon-Lévy 症候群1例がみられた。慢性辺縁性の炎症性病変においては、単純性歯肉炎、増殖性歯肉炎、限局性の骨吸収を有する歯周炎、高度歯周炎の順に女性の占める割合が増し、高度歯周炎では1対4の割合で女性に多くみられた。また、女性において、生理が時々乱れる、全く不順であると答えたものもこの順に増加する傾向を示していた。患者家族の歯周疾患の有無に関しては、増殖性歯肉炎・限局性の骨吸収を有する歯周炎・高度歯周炎のいずれも3分の1の肉親に歯周炎の罹患が認められ、これら病変の発現に家族性があることを推測させていた。若年性歯周炎の範疇に含まれる高度歯周炎26例のうち、いわゆる Incisal-Molar pattern が23例、Generalized Pattern が3例認められた。特殊な歯周疾患では、ダイランチン歯肉増殖症において歯槽突起の過形成を伴う症例が見られていた。一方、10歳代に発現する急性ヘルペス性歯肉口内炎は20歳代に発現するものと比較して臨床症状が軽度である傾向が認められた。若年者の歯周疾患については未だ明らかでない点も多く、今後さらに要因の分析と経時的観察を試みたいと考えている。

演題8. 歯周症、いわゆる若年性歯周炎と診断された症例の臨床経過について

○佐藤 仁哉, 佐伯 厚夫, 渋井 発,  
佐々木 秀, 諸橋 一成, 森川 伸彦,  
菅原 教修

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

歯周組織に高度の破壊をもたらす病変を、古くは歯周症と呼称していたが、1966年の AA.P の提案以来、近年では若年性歯周炎と呼称するようになっている。歯周症という10代後半から30代前半の比較的若い年齢層にみられる高度の歯周組織破壊を、青春期の時点における初発病変で診断することは不可能に近く、この点が病変の存在や把握を難しくしている。病変の初発が炎症性であれ、変性性であれ、第2次徴期に初発し、10歳代で骨吸収を示す例は、実際に存在しており、これらの病変を5年あるいは10年単位で観察することによって初めて、歯周症、すなわち若年性歯周炎の本態が解明されるのではないかと思われる。我々は、先に教室の熊谷らが検索した、若年者にみられる歯周炎の中で若年性歯周炎の範疇に含まれると判定された高度歯周炎26例についての臨床的分析を試みた。男女比は5対21と女性に多く、うち男性4例、女性18例は初診が17歳以降である。初診時の主訴についてみると発赤、腫脹、出血を訴えて来院する例が全体のほぼ7割を占めており、11例は歯周組織の異常を来院3年以上前から自覚している。また、ほぼ1/3の肉親に歯周疾患の罹患がみられること、女性21例中、15例は何らかの意味で生理が不順であることなどが判明している。歯槽骨の吸収形態を見ると、切歯部では、上顎が垂直性の吸収を示す例が多く、第一大臼歯部では、男性、女性とも左右垂直性の吸収を示し、一般に吸収は対称的に生ずる傾向があった。また残存歯槽骨保持量についてみると、男女差、上下顎差は明らかでなく、年齢による差もみられなかった。歯周ポケットは、上顎では臼歯部が、下顎では切歯部が深い傾向を示している。今回の検索から、若年性歯周炎として扱われている病変の発現には、内分泌異常や遺伝などの全身的原因も、何らかの点で大きく関与しているように推測され、今後これらの点をふまえた上での長期的経過観察を試みる必要がある。